

後漢の五行説は多種多様であり、劉向・劉歆のように分野を越えて諸五行説を関連付けて論じる者もいれば、前漢期と同様に個々の分野で異なる構造・配当を許容する言説も見られる。

前者に類する説としては、例えば永平四年春、東平憲王劉蒼が明帝を諫めて上書した文面が、『洪範五行伝』の句を引きながら、それを「失春令」と説き、時令の思想を以て『五行伝』を解釈している(1)。つまり、本来異なる事柄(時候・災異)についての説である時令と『洪範五行伝』とを、同じく五行を説いたものとして結び付けて考えたのである。

後者では、例えば『白虎通義』が、五祀篇では一年を春(木)・夏(火)・季夏六月(土)・秋(金)・冬(水)の五季に区分しながら、五行篇では一年を九十日ずつ四分し、各季節の末尾十八日を「土王」とし、五行の土は「王四季、居中央、不名時」であると言う。また、五帝についても、五行篇では五方五季の帝を「太皞・炎帝・黄帝・少皞・顓頊」とし、月令説に従っているが、号篇では「黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜」を歴史上の五帝とする説を採っており、劉歆のように季節の五帝と歴史上の五帝とを統一させてはいない。

しかし、『白虎通義』もまた、五祀の際に供える臓器については月令に従いながらも、配当は欧陽尚書・医学の説に従い、それらをうまく融合させようとしている(2)。結果的には様々な系統の五行説が体系化されなまま並存しているが、相異なる説同士を融合させようとする議論自体は存在したのである。

このように、本来系統の異なる五行説同士をうまく符合させようとする意識は、(結果的にうまく符合できたか否かはさておき)後漢期の学者の多くが共有していた。本章では、後漢期の学説(もしくは時代が確定できないものの後漢以降と考えられる学説)のいくつかを取り上げ、その議論の手法について考察する。